

韓国カトリック大学における教壇実習報告

学習者の立場を考えるとということ

信州大学人文学部4年 酒巻 愛（日本語教育学専攻）

カトリック大学での実習授業は、1単元を前半部分と後半部分に分け、チームティーチングの形態をとった。筆者を含むグループは単元の後半部分を担当した。前半部分の活動内容が主に文型の定着を図るというものであったので、後半部分の活動内容は覚えた文型を使用して練習を行うことを目標においた。指導案を作成する際は、前半部分との兼ね合いなど、授業をどのように進めていくかが大変難しい点であった。以下、段階に分けてどのような流れで実習を行ったかを報告したい。

1. 準備

準備の最初の段階として、まず教科書分析を行い、教科書に出現する文型についてその内容と順番などを整理し、学習活動においてどのように提出するかを検討した。単元の前半部分では道を聞く言い方と道順説明の言い方の両方が提出され、またその場面として直接道を聞く場面から電話で聞く場面へと移行していき、文型の丁寧度が増していくというものであった。しかも段階を経るごとに会話の構造としても複雑さを増している内容であり、それらをどのように後半の学習活動の中に盛り込むかということはとても難しい事であった。限られた時間の中で、どの文型を使用して学習活動を行って欲しいのかを明確にした方がよいと考え、たくさんある文型の中から核となる文型を提示し、一つの会話例を示す事にした。

教材の準備では、練習に使用する地図と練習の際に使用するタスク、そしてプリント数枚を作成した。練習では実際に地図を使用して道を聞き、道案内をするということを目的としていた。架空の地図を作成使用するという選択肢も考えられたが、交流の対象である信州大学を紹介する意味を兼ねて、自分たちが住んでいる松本市の地図を使用することにした。理由としては実際の地図を使用することによって練習の場面をより実際の場面に近づけたいということがあげられる。地図は黒板に貼るものと学生に配布するものを作成し、学生に配布する地図はインフォメーションギャップを適用した地図を二種類作成した。また、地図には初めて目にする建物もたくさんあるので、日本独特の建物の説明と写真を載せたプリントも作成した。日本の建物の説明は、説明する言葉自体が日本独特のものな

ので、こういった言葉を使用したら分かりやすいか、言葉を選ぶ事がとても困難だった。

2. 授業

実際の授業では三人で役割を分担し、自分はロールプレイと地図上に登場する建物の説明を担当した。ロールプレイは文型提示の場として分かり易く、聞き取りやすく発話する必要もあり、さらに実際の会話としても違和感のないよう話すスピードやイントネーションに気を遣う必要があった。また、学生に親近感を抱いてもらえるよう、親しみやすいキャラクターを演じることも心掛けた。建物の説明では、事前に準備したプリントを使用する予定であったが、事前指導の際にその説明文の内容が難しいというご指摘をうけたので、実際の授業では写真のみに注目してもらい簡単な説明を口頭で行った。プリントなどに限らず、授業において様々な活動をする際は、それを使用してどのような活動を行いたいのか、どのような目的があるのかということを確認にしないではいけないというご指摘も受けたのだが、自分たちの授業案にはそのような明確な点が欠けていたので、授業の直前まで具体的な計画をするよう心掛けた。建物の説明のプリントに関しても、学生に説明文を読むという読解をやって欲しかったのではなく、固有名詞である建物の名前を理解して欲しかっただけなので、内容が難しい説明文には触れないようにした。

授業中は三人が順番に中心となって授業をすすめるという形態を取った。そして中心とならないときはプリント配布や板書などをするなどの補佐的な役割に従事した。ここでも事前指導でご指摘を受けたのだが、授業の中心となる人物がころころ変わってしまうと学生が戸惑ってしまうということであったので、授業中は中心となる人物は真ん中に、そして補佐的な役割につくものはできるだけ教室の端の方にいるということを徹底した。また練習に多くの時間を使ったのだが、初めて見る地図を使用し、さらに使用して欲しい文型も多岐にわたったので、机間支援を十分に行い、学生の理解度を把握することや、理解が不十分な学生の補助に取り組んだ。

3. 反省点

今回の実習において一番大きな反省点は、学習者の立場を考えていなかったということである。実際に本物の学習者を前にして授業をするということは、学生である自分の立場では本当に貴重な体験である。閉じた環境の中でひたすら授業案を作るだけでは、とすれば学習者の立場は忘れてしまい、自分本位な授業案を作ってしまう危険性がある。今回行った授業でもそのような場面が多く見られたと思う。自分たちが授業の中に盛り込んだ活動は様々なものがあったが、その活動を行う中で、学習者にこれをさせたいという意図があるのか、またその活動は学習者にとってはどう効果的であるのかなど、一つ一つについて明確に具体的

に考えておく必要があった。さらに、今回の授業では、松本市の地図を使用したいという自分たちの要求が先にきてしまい、学習者にとっては内容が飛躍しすぎてしまいかなり難しいものになってしまった。自分たちのひとりよがりて授業を計画するという事はあつてはならない事だと考える。常に学習者の立場に立ち、今学習者にとっては何が必要なのか、何を行うべきなのかということを決して忘れてはいけないと思う。

今回は我々の未熟な授業にも関わらず、学生たちは一生懸命に取り組んでくださって、本当に感謝の気持ちで一杯です。このような機会を与えてくださった先生方、学生の皆さんに心から感謝したいと思います。

日本語教育実習を終えて

信州大学人文学部 4年 佐藤智佳子（日本語教育学専攻）

2004年度の「韓国言語文化研修」では、海外における日本語教育の現場で教壇実習をさせていただく機会を得ることができた。カトリック大学校での日本語教育実習は、日本語教育学を学ぶ者として、これまで学んできたことを実践にうつす場になった。不安と試行錯誤の中で日本語教育実習に取り組むこととなったが、自分自身にとって大変貴重な経験になった。いかに取り組み、何を考え、何を感じたかを振り返ってみる。

日本語教育実習は、「韓国言語文化研修」の一環として時間を設けていただいた。時間の関係上、実習生六人に割り振られた時間は二時間だったので、三人一組で1時間を受け持つことになり、田口、中島、佐藤で一時間目の授業を受け持つという授業形態をとった。1時間目は道案内の文型の導入に重点を置いたため、一度に三人が教壇に立ったり、三人が入れ替わって教壇に立ったりすると学生が混乱してしまうのではないかと考え、混乱を避けるために、授業進行（田口）、授業補助（中島、佐藤）と役割分担を徹底した。

日本語教育実習をさせていただくにあたって、実際使用の場面での自然な会話を想定すること、貴重な時間をどのように生かせば、有効な時間となるのかということ、学習者にとってどういった方法で授業を進めると理解しやすいのかということ念頭に置き、三人の授業の連携を考えながら準備を進めた。

実習準備としては、指導案作成の際、はじめの段階では道の聞き方の丁寧さに重点を置いていたが、それだけでは不十分だったため、教科書分析を徹底させ、教科書を活かすことを考えた。そして、二時間でひとつの授業となるように心がけ、試行錯誤を繰り返した。教材は、絵カードを作成したり、文型カードを作成したりと何度も教材を作成したが、最終的には、文型を書いた模造紙や地図を作成し、目的地を書いた単語カードを用いた。私は主にロールプレイでの授業補助

を担当した。ロールプレイは学習者に実際に日本語を使用する場を想定させるための効果的な方法である。自分が担った役割が授業においてなぜ必要なのか、どんな意味を持つのかを考え、目的意識を明確に持って実習に挑む必要があった。実習の準備において、準備期間が短かったため、十分な準備ができるか不安であり、精一杯準備不足のないよう心がけたが、実際に学習者の前に立つと、準備不足を露呈していたのではないかと思い、知識の幅を広げるためにも、どんなに準備をしても充分ということはないと思った。

日本語教育実習を終えてみると、様々な反省点と課題が残った。まず反省点として挙げられるのが学生との関係作りや、教室の雰囲気を作る必要があったということである。授業進行において教室の雰囲気は授業をスムーズに進めていくためには必要な要素である。実習生は緊張した状態で授業に入ってしまったため、学習者に緊張が伝わり、学習者も緊張してしまったということが、斉藤先生によっていただいたアンケートで分った。実習生という立場上、関係作りや雰囲気作りは難しいとは思いますが、学習者に対して学びやすい雰囲気を作るという配慮が必要であった。また、授業内容が文型の導入であり、たくさんの文型を一度に扱ってしまったことで、あわただしくなり、学習者からの自発的な発話が少なく、教師側の一方的な授業になってしまったように思う。学習者の自発的な会話を促すことを考える必要があった。また、教材については、分りやすさも必要であるが、学習者がより興味を持てるような写真などの資料を用い、視覚に訴えるということを考えなければならなかったと感じている。実習を通じて、日本語教師には、自然な談話を導くために、実際使用を想定して例文を作ること、予想していないことが起きて教える立場としての責任と自覚を持ち、臨機応変に取り組む姿勢が重要であり、不可欠な要素であると痛感した。

今後の課題としては、実習生としての学習者との関わりかたを考えなければならぬ。今回は、実習後に斉藤先生に実習に関するアンケートを行っていただいたが、本来ならば、学習者の今回の実習に関する率直な意見を聞くために実習生が実習後にアンケートを行う必要があったと思う。

日本語教育実習は、私にとって貴重な経験となり、実習の場に立てたことは、何よりも自分の糧となった。この経験を今後生かしていきたいと思う。

最後に、私たちを実習生として受け入れてくださったカトリック大学校のみなさん、お忙しい中ご指導くださった、沖先生、斉藤有紀恵先生には心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

日本語教育実習を終えて

信州大学人文学部4年 田口愛葉（日本語教育学専攻）

1. はじめに

10月に行った韓国カトリック大学校での日本語教育実習について、その準備と実際の教壇実習、終えての反省・課題に分けて以下に記述していく。

2. 日本語教育実習

2.1 準備

日本語教育実習では、韓国カトリック大学校での日本語教育実習に向け、授業内で日本語教育の理論を学び、模擬実習を行なった。模擬授業では、場面シラバスを使用せず、学習者に実際使用の場面を与えなかったことが主な反省点として残り、それがこのカトリック大学校での日本語教育実習での課題ともなった。

授業の内容は道案内で、この単元の目標は①道順を尋ねることができるようになる②道順を案内できるようになる③実際使用できるようになる、という3点であった。道順を尋ねること、そして道順を案内することの2つを別のものと考えて、2コマのうちの1コマ目と2コマ目でそれらを分けて指導案を作成してしまっただが、沖先生から指導をいただき、指導案を練り直した。それにより私たちの班は、道順を尋ねる、道順を案内する、両方の文型の導入を主にした指導案作りを行なった。実習の前日、担当教官であるカトリック大学校の斎藤先生に指導案を見ていただいた。指導案を具体的にすること、何のために補助教材を用いて、何を教えたいのかをはっきりさせることを指導していただいた。補助教材としては、必要性和目的を考えた上で文型カードと地図を用意した。

2.2 教壇実習

実際の教壇実習では、実習生3人のうち1人が主に教壇に立ち、他の2人は教壇補助という形を取り、それぞれの役割を固定した。その結果、3人の動きで、学習者の注意が散漫にならないよう心がけることが必要となった。

実習の前日、担当教官であるカトリック大学校の斎藤先生から、授業では予想外の事態が起こることが多々あるので、準備は万全にしておくようにとの指導をいただいていた。しかし授業の開始が遅れ、その事態を予想していなかったため、時間内に全てを終わらせられるように臨機応変に対処することができなかった。また、予定していた文型をできるだけ多く導入しようと考えたことで、進行のテンポが速まり、一つ一つが説明不足になるという結果を招いてしまった。

2.3 実習の成果・反省・今後の課題

実習を終え、授業の主役は学習者であり、学習者の視点で授業を組み立てていかなければならないことを学んだ。教えることばかりを中心に考えていたところを斎藤先生よりご指摘いただいた。それはすでに授業の最初からみられた反省点

であった。今回の日本語教育実習は、教室の後ろでビデオ撮影をさせていただいたのだが、学習者に対してビデオ撮影をすることを伝えなかった。自分たちには利益になることでも、学習者にとっては負担となることである。また、ビデオの設置に戸惑い、その間学習者を待たせてしまった。学習者にとっては貴重な授業時間、それを空白のものとし、それに対し何も説明をしなかったということは、学習者のための授業である、つまり授業の主役が学習者であるということを念頭においていなかった証拠である。授業の中でも、用いる語句を学習者が知っているかどうかの確認や、意味を理解したかどうかの確認などがおろそかであり、こちらが知っている、理解しているものとして進めたことから、説明不足になった部分があった。

先で、準備段階にあたる模擬実習からの課題について触れた。今回の教壇実習では、実際使用の場面までは予定していなかったが、文型を導入する際の適切な場面設定がなく、学習者がついていけないということがあった。文型に沿った場面を設定すること、また、場面に沿った文型を導入することが必要であった。

3. おわりに

本実習では、実際に教壇に立ったことで、参観実習や模擬授業以上に得たものが多かった。特に、授業は教師のものでなく学習者のためのものであるということを変更して学ぶことができた。指導案作成から教室運営に至るまで、常に学習者の視点に立ち、ニーズを理解しなければならない。日本語教師は、日本語や日本語教育についての幅広い知識では補いきれない資質をもちかね備えていなければならない。

今回、実際に日本語を学習している学生を対象に実習をさせていただくことができ、非常に貴重な経験であった。このような機会を与えてくださった先生方に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

日本語教育学会編(1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社

日本語教育実習・韓国カトリック大での教壇実習を振り返って 信州大学人文学部4年 中島葉子(日本語教育学専攻)

本年度の日本語教育実習では、韓国のカトリック大学校で、実際に教壇に立たせていただく機会を得た。ティームティーチングという形で、一回の授業に三人の実習生で臨む形になったが、ティームだからこそ考えなければいけない点なども経験的に学ぶことができ、非常に貴重な機会となった。今後、本報告が少しでも後輩の参考や助けとなることを願って、自分が学んだ点、気づいた点について整理していきたい。

今回の教壇実習を通して、最も深く重要性を感じたのは、事前の準備である。教師側が「何を教たいのか」ということを明確に意識し、それを学習者の立場に立った授業として立案し、実践に移すということは、一度検討しただけで決定することではない。私たちの計画に対しても、始めは学習者の立場に立って考えるということさえ上手くできていなかったように思う。日本語を話せる者が、上手く話せない者の立場に立って考えなければいけないのだから、当然といえば当然のことかもしれない。

準備といっても色々あるが、事前に行った模擬教壇実習で、教案作りの時から実際教壇に立った時まで、「何を教たいか」を常に意識することが重要だということを学んだ。つまり、授業の流れを考え教案を作る時は、教えるべき項目を明確にした上で、教授方法を検討しなければならないし、教材を製作したり集めたりする時は、この教材で目標としている項目が教えられるか、学習者に学習効果が生まれるかどうかを考えなければいけないということである。「何を教たいか」を意識しなければ、実際に教壇に立ち、学習者の予想外の発言や行動などに遭遇したとき、教えるべきことを見失いかねない。始めは学習者の立場を考えたり、学習者の言動を予測することに幅がなかったように思うが、カトリック大で斉藤先生に事前指導を頂いたりする中で、徐々に学習者に近づくことができたように思う。また、ティームティーチングの良さも実感できた。つまり、複数人数で予測できるさまざまな場合を検討しあうことができたことは、初めて外国人学習者の前に立つ私たちにとって心強いことであつたし、準備にできる限り落ち度があつてはならない状況で、助けとなることであつた。

実際に教壇実習に入ったときは、私たちのグループで教えなければいけないこと、つまり新しい文型を導入しできるだけ定着させるということを中心に集中しすぎて、後半を受け持つグループとのつながりを、結果的に軽視する形となってしまった。学習者の視点を考えるということが、まだ欠けていたのである。私たちが実習を行う前までどのように授業が行われていたのかを、できるだけ事前に調べておくことはもちろん必要であるが、実際に授業を見てから実習に入ることはできないため、やはりできるだけ幅広く学習者の視点を考えておかなければならないのである。

教壇実習後に斉藤先生から頂いた事後指導では、文型導入の際の場面設定に不自然で強引な面があつたり、学生の発言に対するフォローの不足など、やはり学習者の立場に立った見方が不足していた点について多く指摘を受けた。教えるべきことを見失わないことは教師にとって重要なことではあるが、学習者にそれが効果的に浸透しなければ何の意味もなくなってしまうのである。

今回の教壇実習を通して、教科書や指導書などを読むだけでは体得できないであろう経験をすることができた。今後も、この貴重な機会ができるだけ豊富に提

供され、多くの後輩の学生が経験されることを願っている。最後になりましたが、この機会を与えてくださり、私たちをサポートして下さったカトリック大の斎藤有紀恵先生、李範錫先生、学生さんたち、スタッフの方々、そして信州大学の沖裕子先生には本当に感謝しています。ありがとうございました。

カトリック大学校での教壇実習を振り返って

信州大学人文学部 4年 向出真理子（日本語教育学専攻）

1. はじめに

今年度の韓国言語文化研修において、日本語教育の教壇実習をさせていただく機会を得た。準備の過程と、教壇実習を通して学んだことを以下に述べていく。

2. 指導案と教材の作成

今回は実習生6名が2グループにわかれ、2時間続きの授業を50分ずつ担当することになった。実習生全員での自主ゼミや沖先生との事前指導をふまえ、今回担当する道案内の単元を、1時間目で道を聞く表現と道順説明の表現の導入、2時間目では聞き返しなど確認表現の導入と、実際使用の場面を想定した道案内の練習というふうに分けた。私のグループは2時間目をする事になり、特に「実際使用」の場面での練習に重点を置くことにした。そのための教材となる地図づくりにも力を入れた。地図は学生が見知らぬ土地として松本駅前の地図にし、あわせて松本の名所についても触れることにした。教材用の地図ということで細かな道を消し、導入した文型が使用できるような目的地を設定するなど、多少地図に修正を加えたができるだけ原型を残すようにした。

授業は基本的に私が進行していくことにしたが、ロールプレイや松本市紹介では担当を変わり、3人それぞれが教壇の中心に立つことにした。しかし学習者にとっては、教壇で教師が入れ替わるたびに注意が散漫になってしまうというマイナス面もあり、進行役とサポート役という役割分担のほうが適当であったかもしれない。

3. 教壇実習での反省と今後の課題

教壇実習を終えて、私自身の反省と、斎藤先生から事後指導で指摘されたことを以下にまとめて述べたい。まず全体の把握が甘かったことがあげられる。1時間目とのつながりが薄く、特に導入部分は1時間目の復習というよりも、2時間目の展開につなげる内容になってしまっていた。また2時間目では中心となる進行役が変わる分担をしたが、自分の担当箇所以外の説明内容をしっかり把握できていなかったため、授業が滞ったときにうまくフォローをすることができなかった。今回のように一つの授業をグループに分かれて担当する場合には、グループ内および実習生全体でしっかりと授業の流れを把握し、共通の知識をもって臨む

必要がある。次に、説明や指示の仕方にも反省すべき点があった。タスクの説明はできるだけ簡潔になるよう何度も考えたが、やはり学習者によっては理解しづらかったようである。日本語教師は平明な日本語で核心をついた説明や指示をすることが求められる。また学習者の心理的な負担を考えて、教壇に出て発表してもらうことについては練習の前に言及する必要がある、というアドバイスをいただいた。最後に教材にも問題があった。今回用意した松本駅前の地図での練習は、予想以上に学習者にとって難しいものになってしまった。教材・教具は学習項目を定着させ、学習目標を達成するための手段であり、授業内容との関連や導入した文型も熟慮して用意しなければならない。

4. おわりに

時間が迫った中での準備であったため、50分の授業をつくり上げることに精一杯になってしまっていたことを否定できない。しかしながら授業は学習者のためのものであることを忘れてはならない。常に学習者の立場にたって準備する必要がある。同時に、常に「何を教えたいのか」という視点から目標、学習活動、教材・教具などを考えなければならない。実習を振り返っての反省は尽きないが、それ以上に学んだことも多い。今回の経験を今後大いに役立てていきたい。

最後に貴重な機会を与えてくださった諸先生方と、つたない授業を一生懸命聞いてくれたカトリック大学校の学生の皆さんに感謝申し上げます。

カトリック大学における日本語教育実習を振り返って 信州大学人文学部3年 村松咲穂里（日本語教育学専攻）

本レポートでは、2004年度日本語教育実習でも特にカトリック大学での実習を中心に、日本語教育実習の報告・考察を行っていく。

1. 事前準備

単元は、『日本語会話Ⅰ』の第22課「2番目の角を左に入ってください」であった。この単元は、道の聞き方および道案内の表現を学ぶ単元である。授業時間を二時間いただき、前半後半と分け、三人ずつに分かれそれぞれティームティーチングの形式をとった。道聞き・道案内は1. 話しかけ、2. 道の聞き方・道案内(また相槌や反復などの確認の表現などの要素)、3. お礼という、大きく三つの談話構造になっている。そこで、談話全体の流れを意識し、前半は主に道聞きの表現と教科書に沿った道案内の基本的な文法の導入の定着を中心に指導案を作成した。そして後半は、前半の流れを受け継ぎながら、道聞き・道案内の談話を作り上げることを意識し、主に対話練習を中心に指導案を作成した。対話とは、木村(2000)によると

「対話」とは、それぞれ目的意識を持つ二者のあいだに交互に行われる口頭の言

語行為であって、意志・情報・情緒の伝達・交換のために行われるもの、またその話をいう。

と定義される。つまり学生は道順を知ること、判りやすく説明することなど、目的意識を持ちながら対話することが大切であると感じた。そこで、実際使用の場面を提示し、学生がその場面を意識しながらする対話練習を考えた。

また、教具として、単語カードや地図などそれぞれの授業で効果的であるものを事前に準備した。

2. 授業内容

では、具体的にどのような流れの授業内容であったか報告する。前半は導入として「日本へ行ったらどこへ行きたいか」という発問から、学習者が日本にいることを想定して、道を聞く表現、道案内の表現へと展開させた。前半は主に句型カードを教具として、反復練習をして基本的な句型の定着を図った。さらに、ロールプレイを交え、実際使用の場面に近づけての模擬対話練習を行った。後半では、導入部分で昼食の韓国料理の話題から日本料理の話題へつなげ、韓国観光者が日本でそば屋の場所を聞く場面のロールプレイへと展開させた。そのロールプレイはまず教師が行い、それを例文として模倣対話練習をし、一談話としての全体の流れを意識させた。そこでさらに相槌や反復などの、道を聞く方の確認表現を提示し説明を加えた。そして最終的に松本市の地図を使い、実際使用の場合を想定した内容のタスクを用いて道聞き・道案内ができるよう学生同士で練習し、発表した。

3. 教壇実習

次に実際に上記の授業内容に沿った教壇実習を行って、気づいた点について考察していく。まず、はじめに授業としての前半後半の繋がりについて考察する。今回の実習では、一つの単元を2グループで担当し、一時間ずつの授業を行った。指導案を作る段階で、前半と後半で教師が変わることで学生にとって抵抗があるのではないかと考えた。そこで、二時間目はいかに前のつながりを意識して、かつ自然に授業に展開させていくかということに重点を置いた。つまり、導入の部分がとても重要であると考えた。しかし実際の授業では、導入部分というよりは、その後の授業内容の繋がりが欠けていた。前半と後半の授業内容の難易度に差が出てしまったのだ。後半は、前半の句型を使って、道聞き・道案内をひとつの談話として作り上げることを目標として、ロールプレイ、松本の地図を使った練習を行ったが、地図を使った練習で学生の反応が変わった。なかなか道案内が進まないのだ。目標物まで道が複雑で前半に習った句型で言えず、接続詞を駆使してなんとか言おうとするが、不自然な表現になっていた。また発表の際も、レベルの高い学生は、授業では出ていない表現を使用し、こちらで予想していた答えがなかなか返ってこなかった。またそのような表現がでてくると間違っていない

ので、訂正することもできず、そのままになってしまった。どうしてこのようになったのかと考えたとき、やはり前半と後半の難易度に差があったことが大きな要因であると感じた。そして、教師側も可能な表現を十分に予想していなかったことも言える。また、前半の文型を基本とした対話が可能である地図やタスクを提示するべきであった。学習者にとっては、実際自分たちで作業することは日本語能力を試すよい機会であり、難しいものほどやりがいを感じるかもしれない。また、地図も実際にある場所の地図を使うことで実際使用の場面により近づく。しかし、教室には様々なレベルの学生がいることを考えると、やはり基本的な表現に重点を置くべきであった。その点で、前半を含めた授業内容と地図とタスクがどのように関係し、より効果的なものとなるのかを意識していくことが大切である。

二つ目は学習者とのコミュニケーションについてである。授業は教師と学生がいて初めて成り立つものであり、相互のコミュニケーションは欠かせない要素である。今回の実習で印象的だったことは、後半の授業で三人のうち、中心になって授業を進める実習生の立ち位置についてだ。最初は教壇の上から説明を行っていたが、徐々に教壇の下に立ち、学生と近い距離と視線で話をしていった。私は常に教壇の上にいるものと思っていたので、びっくりしたが、学生とのコミュニケーションという点では、とてもよい方法であると感じた。また、そのようにすると学生全員が実習生の方に注目していた。近づくことで学生を引き付け、親近感を持たせることができるのではないだろうか。そしてその後、地図を使った対話練習の中で机間支援をしたが、学生が積極的に質問をしてくれた。このことも、先の行動が要因になっているのではないだろうか。机間支援も授業内で学生とのコミュニケーションをとる機会である。机間支援をし、学生と近い距離で話すことにより、わからない部分を理解させることに留まらず、双方の関係を深めることにつながる。このように、授業内容とは別の要素として、相互のコミュニケーションをはかることはとても大切なことである。

4. まとめ

以上が私が実習を通じて感じたこと学んだことである。今回の実習で失敗したこと、成功したことを通じて、課題となる点は山ほどあるが、みな大切なことであり、ここで学んだことは、これからおおいに役立つことであると確信している。そして最後に熱心に指導してくださった、指導教官の沖先生、カトリック大学の斉藤先生に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

【参考文献】

木村宗男(2000)『日本語教授法—研究と実践—』凡人社